

大阪府立市島図書館

●開館時間 ●休館日
1900年(明治37)財閥住家者のために開設。阪阪に閑す資料や古典籍が豊富で、本館と西宮に指定された。レナガシ返り外装がトロロな窓間を醸出している。

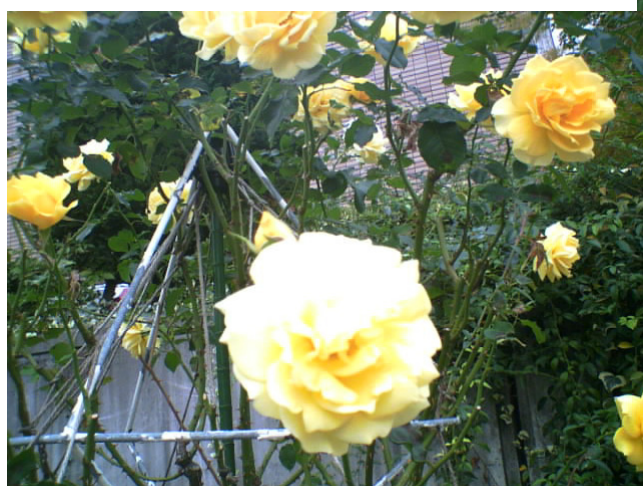
●北区内の主要施設として、昭和9年に開館した。旧館舎は17時。未入館だが、投函の場には閉館前(特別整理係)まで地下道を徒歩十分。

TEL 06-6500-0474 FAX 06-6500-0480

大阪市中央公会堂

●開館時間 ●休館日
市民の増進之助を以て、市に寄付しを私財を基に建立した。赤レンガに緑色のドームの屋根が美しい。オーストラリア様式の公会堂である。中島公島の緑がさわやかで、ステーションのカフェ・レストラン「市島倶楽部」併設。

大阪・中之島公園 バラ園と中央公会堂



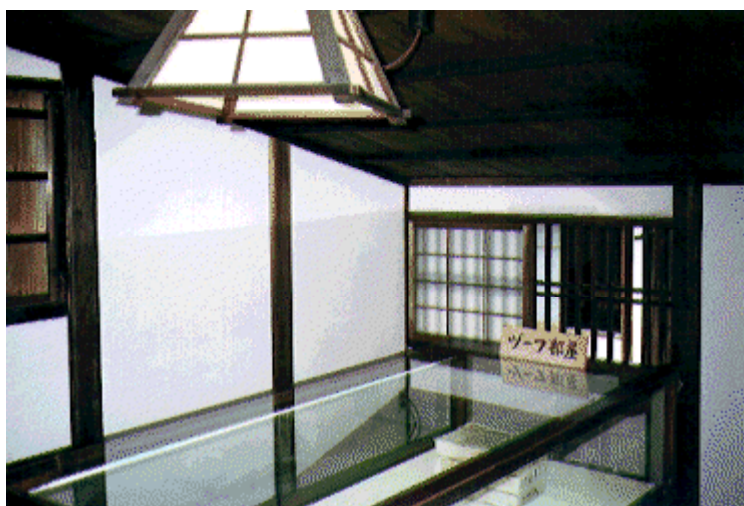
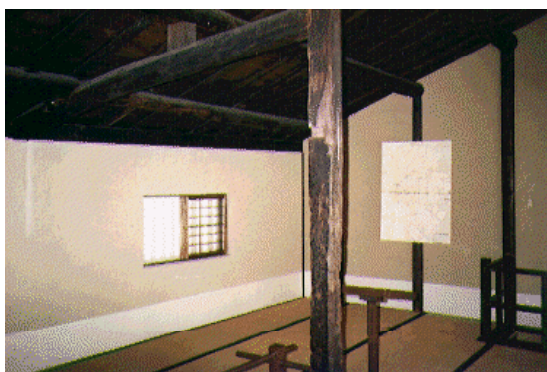
重 **大阪市中央公会堂**
 (おおさかしちゅうこうかいどう)
 地図●P53D1

市民の岩本栄之助氏が大阪
 市に寄付した私財を基に建設
 した、赤レンガに緑青のドー
 ム型の屋根が美しいネオ・ル
 ネッサンス様式の公共ホール。
 中之島公園の緑がさわやかな
 ガーデンテラスのカフェ&レ
 ストラン「中之島倶楽部」も
 併設。

適塾



緒方洪庵（文化7年、1810～文久3年、1863）



ゾーフ部屋

大広間

福沢諭吉や大村益次郎など多くの先覚者を輩出した、幕末の蘭学者・緒方洪庵が開いた学塾跡。オフィス街に突如、姿を現す町家風の建物は、日本の蘭学塾の唯一の遺構として史跡・重文にも指定されており、塾生が寝起きした部屋や刀傷が残る部屋、塾生が使ったものと同じゾーフ辞書（蘭和辞典）が置かれた部屋などを見学できる。所要15分。

▼中央区北浜／料250円。時10～16時。休月曜（祝日の場合は開館）、祝日の翌日（土・日曜、祝日の場合は開館）。◎地下鉄淀

適塾
(てきじゅく)
地図●P53C2

適塾

蘭学者、医師であり教育者としても知られる緒方洪庵が、幕府の奥医師として江戸に迎えられ、1845年(弘化2)から約20年間にわたり住まいし、塾を興したところがこの適塾である。



1階奥が[洪庵の家族の住居](#)で、2階には、当時1冊しかなかったゾーフ辞書(長崎出島のオランダ商館長ゾーフがハルマの蘭仏辞書に拠って作成した蘭和辞書)をめぐり、日々争奪戦が繰り広げられたという[ゾーフ部屋](#)と塾生の起居した[大広間](#)があった。大広間には、激論の末であろうか、柱に無数の刀痕が残されている。

適塾では、蘭学が連日講義され、若き学徒が切磋琢磨して自己の向上に努め、その後の維新の改革を担った多くの俊秀を生み出した。

ここの教育方針は、きわめて組織立ったもので、しかも各自の努力によって実力を養うことを主眼としていた。蘭書を輪読し、成績によって等級分けがされていた。また、適塾は単なる医師の養成所でなく、蘭学を学びたいものはいくらでも入ることができたことは大きな特徴である。また、ペリー来航(1853年)の翌年には、洪庵は知人あての手紙に、「近時は医業を簡略にして専ら現今に必要な西洋学者の育成を主としている。」と述べている。これは時代の転換期に際して、医師にとどまらず洋学者の育成が重要であるという洪庵の見識を物語るものである。

現存する姓名録等によれば、適塾の入門者は日本全国から集り、その数は1000人にも達していた。明治維新を向かえる以前に刑死した橋本左内をはじめ、大村益次郎・佐野常民・杉亨二・箕作秋坪・大鳥圭介・長与専斎・[福沢諭吉](#)らとともに、塾を出て直ちに故郷に帰り、後進を指導しつつ、近代日本の建設に活躍した者が多かったことは、忘れてはならない。

京都 清水寺



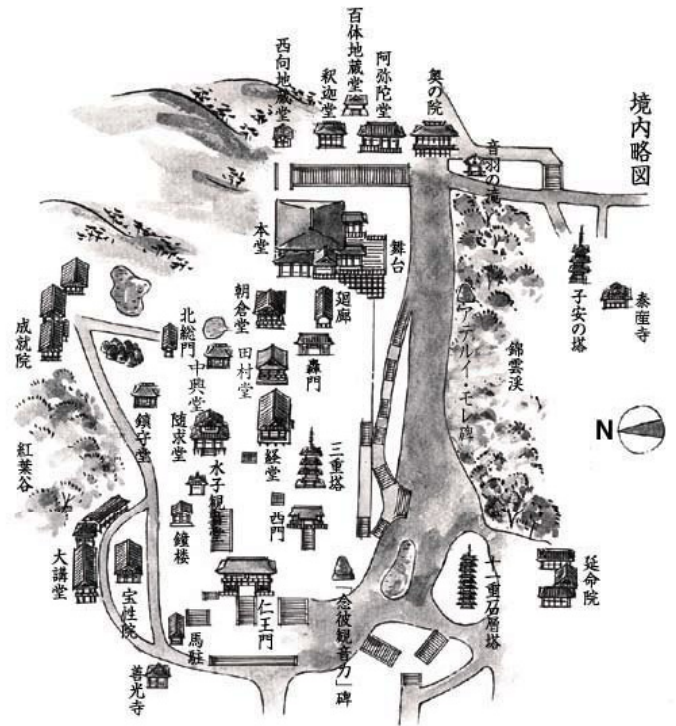
撮影： 豊田先生(浜松)

山本 今井 勅使河原 大津 穂積 藤岡

京都 清水寺



重要文化財・田村堂(開山堂)



↑ 鐘楼
↓ 経堂



本堂と部隊



京都三十三間堂



国宝 三十三間堂

（こくほう さんじゅうさんげんどう）正式名は、蓮華王院で、その本堂が「三十三間堂」と通称されます。これは、東面して、南北にのびるお堂正面の柱間が33もあるという建築的な特徴によります。「三十三」という数は、観音菩薩の化身三十三身にもとづく数を表しています。

平安後期、約30年の間、院政を行った後白河上皇が、自身の職住兼備の「法住寺殿・ほうじゅうじどの」と呼ぶ院御所内に、当時、権勢を誇った平清盛の資財協力によって創建したものでした。ところが、そのお堂は建長元年（1249）、市中からの火災により焼失し、鎌倉期・文永3年（1266）に再建されたのが現存のものです。朱塗りの外装で、堂内は、花や雲文様の極彩色で飾られたといい、今もわずかにその名残を停めています。

地上16メートル、奥行き22メートル、南北120メートルの長大なお堂は、和様、入母屋造り本瓦葺きで、手前からはるか彼方へ一点透視的に漸減する眺めは、胸のすく壮快さです。



京都宇治川

塔見茶屋旅館前

宇治川の日の出



宇治川の屋形船



京都 宇治平等院



南門

鳳祥館

京都 宇治平等院

雲中供養菩薩像（全体）



鳳凰堂中堂母屋内側の長押（なげし）上の小壁（こかべ）に懸けならべられている52体の菩薩像。この群像も定朝工房で天喜元年（1053）に製作されたものです。

南北二つのコの字形に本尊阿弥陀如来坐像を囲んでならんでいます。南北半数ずつに分けて懸けられ、各像には北側分は1から26までの、南側分は1から25までの番号を、背面壁からはじまり側面壁をへて正面壁にいたる順につけています。南側の最後にある1軀は、他の51軀が国宝指定を受けた後に堂外から発見されたものであり、番外とされています。

各像はいずれも頭光（輪光）を負い、飛雲上に乗ってさまざまな変化にとんだ姿勢をとります。5軀は比丘形（僧形）で、他は菩薩形です。比丘形の5軀はいずれも坐像で、3軀は合掌し、2軀は印を結んでいます。菩薩形の像は多くが坐像で、それらはいろいろな楽器を演奏したり、あるいは持物をとったり、合掌したりしています。菩薩形像のうち6軀は舞い姿の立像です。

各像のゆったりとしたやわらかな肉どりや、穏やかな顔だち、自然な衣文などは本尊阿弥陀如来像に共通しています。

京都 宇治平等院



本尊 阿弥陀如来

鳳凰堂の本尊阿弥陀如来像は、日本の仏像作家を代表する仏師定朝によって平安時代後期、天喜元年(1053)に造られたものです。その構造技法は日本独自の寄木造りの完成した技法を示します。また表現の上でも日本独自の様式、いわゆる和様の完成を見せる点がたいへんに重要です。頬がまるく張った円満な顔。伏目がちですが意外に大きな眼は拝む者を静かに見つめ、その表情はかぎりないやさしさにあふれています。胸をひいて背をわずかにまるめた姿勢には無理がなく、いかにも自然で、どこにも硬い緊張感がありません。

京都 宇治平等院



京都 宇治平等院



今井 勅使河原
山本 大津
林 穂積
藤岡